



兵庫県立但馬やまびこの郷

Web版／令和6年3月 虹のかけ橋

<https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>



「不登校に関する研修会」報告



「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、兵庫県の公立小・中学校の不登校児童生徒数は、14,177人でした。不登校の要因・背景は多様であり、児童生徒や保護者との効果的な教育相談、不登校の未然防止、SCやSSW、専門機関との連携、一人一人に寄り添った支援が求められています。

そこで、当所では不登校児童生徒への対応について理解を深めるために、不登校に関する研修会を今年度4回実施し、4名の先生に講義をしていただきました。その講義の一部を紹介します。

第1回

日時・会場：令和5年7月19日（水） 県立嬉野台生涯教育センター

テーマ：「睡眠障害を伴う不登校児への支援

～自己コントロール感を育む関わり方～

講師：豊浦 麻記子（県立リハビリテーション中央病院 小児科医）



不登校にいたる小児睡眠障害の病態仮説として、概日リズム（体内時計が担う働き）がずれたまま登校し、睡眠不足が蓄積することで自律神経症状が出現し、学校に行きづらくなる。背景に学習困難や対人構築の苦手さ、ストレス耐性の低さなど学校生活に適應することが困難な発達特性を有することが多い。ストレス対処法が乏しく、二次的にスマホやゲームへの依存へとつながって不登校になっていることもある。

ストレスの対処法として、自分自身の考える力（より広く、より深く考える力）、人とやりとりする力（援助要求、気持ちの共有）を育むことで、ネットやゲーム依存などの現実逃避行動の比重を軽減することができる。

不登校児童生徒への支援については、小さな成功体験を重ねて自尊感情を育てることが、逆境から立ち直る土台となる。睡眠障害では、なぜ眠れない生理状態となっているのか、なぜ子どもが眠ろうとしないのかを考える必要がある。そして、安心できる環境で、社会性の土台となる基本的信頼関係を子どもと築くという大人側の姿勢が重要である。

第2回

日時・会場：令和5年8月10日（木） 県立兵庫津ミュージアム

テーマ：「発達特性のある不登校児童生徒の理解と支援」

講師：井澤 信三（兵庫教育大学 教授）



発達上の強い特性がある場合、集団の中に入り、共に過ごすことで行動面や情緒面に問題が生じることもある。それが、二次障害であり、不登校やひきこもり、非行や暴力などとして現れる。二次障害の予防のために、最も重要となってくるのは「その人の特性を理解し、その特性に合わせた対応及び環境調整をすること」である。

発達特性のある児童生徒の登校行動が生起しない要因には、学校に来て嫌なことが多すぎる場合、学校に来て良いことがない場合の2つの側面がある。早期の気づきや早期の対応はもとより、原因の除去や軽減、登校ができ、それを維持するための工夫が大切である。また、学期や学年、学校の変わり目が再登校へのチャンスになりやすい。

発達特性のある児童生徒との関わりとしては、まず、信頼関係を作り、人となりをつかむことが大事である。十分に話をきく姿勢をもち、大人からの視点では不条理な言い分であっても、児童生徒がそう思ったことを受け止め、否定することを言わないこと、特性や児童生徒の価値観や考え、思いを把握することが必要である。そして、児童生徒自身の困難に対して生活がスムーズに送れるような支援を検討する。児童生徒の生活は学校卒業後も続いていくため、卒業後の生活を見据えた支援が必要である。

第3回

日時・会場：令和5年8月17日（木） 県立総合体育館

テーマ：「子ども真ん中『ふくし』の視点からの不登校児童生徒への支援」

講師：野尻 紀恵（日本福祉大学 教授）



現代社会における不登校は複雑化し長期化する傾向がある。一つの専門機関だけでは受け止めるだけで終わってしまうことがある。複数の機関が関わり、共通世界を作ること、様々な見方でアセスメントでき、救うことができる。「子どもを真ん中にした支援」とは、子どもにとっての幸せを最優先して考えることである。

ケース会議を開いて情報を整理する際、ジェノグラムに家族それぞれの情報を箇条書きで書き出すとわかりやすい。そして、ライフイベントを横軸で整理し、つまずきポイントを見つける。支援については、本人の強みを活かし、自信につなげていく。また、保護者との連携、学校内教職員との連携、関係機関との連携など、横の連携を行い重層的な支援を行う。その際、子どもを取り巻く状況を歯車に見立てるとわかりやすい。不登校の子どもたちは、自身を取り巻く状況にがんじがらめになって動けない状態である。そのため、アセスメントでは、子どもを動かすことばかり考えるのではなく、動かせるところを見つけ、そこを動かしてみる。そうすると歯車が回り出し子どもが動き出す。アセスメントを大切にすると、状況は変化するので、その都度アセスメントをし、状況に応じた支援体制に変えていくことが大事である。

第4回



日時・会場：令和5年10月26日（木） 県立但馬やまびこの郷

テーマ：「社会的自立につながる不登校児童生徒の支援について」

講師：伊藤 美奈子（奈良女子大学 教授）

不登校の児童生徒への支援のゴールは「社会的自立」である。自立とは、適切に依存できる対象（場所、相手）や方法を増やすことである。自分の力を分かった上で、上手に頼ることが大切である。そして、学校が目指すのは「自立への一歩」である。小さくても良いので、一歩踏み出す自信をつけることが大切である。

不登校の子どもたちは、ほっとする気持ちと同時に不安や自己嫌悪の気持ちもある。家庭だと安心できるが、心から安らげていない。そのため、何かをしていないとつらいことを思い出してしまうためゲームに依存したり、朝起きていたら周りが学校に行くことを期待することがつらいから昼夜逆転になったりする場合がある。そして、学校に「関わって欲しくない」と思っている、どこかで助けて欲しくなった時には動いて欲しいと思っている。

思春期の子どもたちはうまくSOSを出せない。言語化が苦手で、本当に悩んでいる子ほど自発的に相談しない傾向がある。そして、言葉にできないため行動や身体に現れる。そのため、子どものSOSを受け取る力が大切である。気付きを放置せず、その意味を感知し、チーム学校で取り組むことが重要である。また、子どもを支えている人も支えられることが大事である。

不登校児童生徒への支援について ～ 但馬やまびこの郷が大切にしていること ～

「担任の先生に教えてもらってやまびこのことを知った。来て良かった」

「先生に紹介された。ここで不登校の仲間に出会えて良かった」

中学3年生の子どもたちの言葉です。2月の卒業セレモニーでは、自分の思いを言葉にし、それぞれの道に一歩を踏み出していきました。

当所を初めて利用する子どもたちは、最初はとても緊張しますが、回数を重ねる毎に心のエネルギーがたまっていき、前向きな変化が見られるようになっていきます。それは、何度も利用している子どもたちや年上のお兄さんお姉さんたちが、とても優しく接していることが大きな要因の一つです。しかし、常に前向きな変化が見られるわけではありません。笑顔が多く「最近、給食だけ学校に行っているんや。給食美味しいで」等と話してくれる時期や一人で過ごしたい時期等、いろいろな時期があります。

子どもたちの支援で当所が大切にしていることは、

○寄り添う

共感的理解と受容の姿勢を持ち、まずは丸ごと本人の気持ちを受け止めるようにしています。

○意思を尊重する

本人の意思を尊重して、できるだけ自分で自己選択・自己決定し、主体的に取り組めるように支援しています。

○認める

結果だけでなく、その過程を大切にして、小さな変化も逃さずに認めるようにしています。

○つなげる

子どもたちがお互い（自分と友だち）の良さに気づき合い、仲良くなれる活動を取り入れています。



の4つです。次に、当所での支援の例を紹介します。

「やりたくない」「めんどくさい」と言った場合

まずは子どもの気持ちを丸ごと受け止めます。その上で、子どもの話をゆっくり聞くと「見通しが持てず不安だった」「できる自信がなかった」等、本当の気持ちが分かってきます。そうすると、次は子どもたちに合った支援ができるようになっていきます。そして、子どもたちが少しずつ自信をつけていくと、様子が変わってきます。

「帰りたい」と言った場合

「帰りたい」と自分の気持ちを伝えることができたことを認め、無理に引き止めません。気持ちを第一に受け入れることで、子どもは「しんどくなったら帰れる」と安心します。そして、次の利用にもつながりやすくなります。

活動に参加しにくい場合

まずは活動時間中の過ごし方について、子どもと一緒に考え、子ども自身が決めるようにします。そして、活動に「参加できた・できなかった」の結果だけにこだわることなく、自分で決めた方法で過ごせたことを認めます。そうすることで、子どもたちは活動に参加できなくても、そのことを失敗体験として受け止めなくなります。このような自己選択・自己決定を繰り返しながら、子どもたちは自信をつけ、少しずつ活動に参加するようになります。

人との関わりが苦手な場合

最初は、大人との関わりを大切にします。子どもにとって安心できる人が1人でもいることがとても大切です。そこから、大人を介した子ども同士の関わり、次に子ども同士の直接の関わりとつないでいきます。中には、同学年との関わりが最も苦手な子もいます。そのような場合は、異学年との関わりが有効です。

当所では、子どもたちが心のエネルギーをためられるように支援しています。心のエネルギーがしっかりたまると、子どもたちは次の道を自分で選び、進み始めます。不登校児童生徒の支援に迷った時、「寄り添う」「意思を尊重する」「認める」「つなげる」を意識して関わってみてはどうでしょうか。